

近世哲学研究

第 8 号

-
- 自由の軌跡 ——— 北岡 武司 1
——批判哲学における自由の可能性の意味——
- 認識か解釈か ——— 福谷 茂 22
——新しい哲学史像のために（二）——
- G・ハーマン相対主義説の論理 ——— 田中 一馬 52
- 歴史的理性の生成 ——— 浅沼 光樹 71
——シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義——
- * * *
- 《書評》
北岡武司著『カントと形而上学——物自体と自由をめぐる』
————— 橋本 武志 93
- N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カント『純粹理性批判』注解』
————— 長田 蔵人 104
-

2001

Epistola XIV

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

中世起源の機関であるヨーロッパの大学は、いわゆる国民国家より深い淵源と幅広い声望を持つている。ルターは当初自分のテーゼの判定をバリ大学神学部に仰ぐつもりだった。デカルトが『省察』を同じ機関の審判に委ねようとしたのは、彼がフランス人であったからではなく、同じ伝統のもとにあったからにほかならない。近世初期には由緒の古い大学のほうが新参者の国家に対して正統性において優位にあった訳で、確定された領域内の主権の独占を本質とする近世国家にとつて大学はもともと已む無く追認させられた異分子に過ぎない。ホップズが『ビヒモス』でイギリス一七世紀の大内乱の原因を大学の存在に求めるのは、国家の側から見た異物としての大学の相貌をよく示している。その残像は容易に消えず、エイヤーの自伝によると、二〇世紀になってもオックスフォードの教員は選挙の際にタウンの一員としての票とガウソンとしての票との二票を持っていたそうである。

国家および国家がその要請に答えて成立した社会的条件にとつては大学は単に能率の悪い存在としか見えない道理である。中世起源の団体の特質として大学の本質は試験による資格の認定と附与であり、言わば自己と等しい特権を持つ仲間、つまりギルドのメンバーをむやみには増やさずに認定することである。人材養成や教育自体は主目的でない。大学改革に手を焼いたりシユリユーの文教政策は、目的合理的な対抗教育機関を新しく設立することであった。こうしてフランスのさまざまなアカデミーが生まれた。そしてナポレオンはさら

に少数精鋭主義のグランゼコールを作ったのである。

さてわが国では大学はまず国立大学として創立された。そうして生まれた国立大学も平成一六年には国立大学法人なるものに移行するそうである。以上のようなヨーロッパの事情から「日本の大学」とその改革にいかなる教訓を引き出すべきなのだろうか。しぶとく生き延びてきた大学を見直すのか、新旧組織の競争状況を活用した欧州諸国家の知恵を認めて学ぶことを提唱するのか、記者の脳裏を去来する思いに明確な形を与えることはまだできないのであるが、どうも同じような形態へと例によって一斉に移るのは少なくとも芸のない話のように思えてならない。

今号からは書評を新設した。およそ学術雑誌にとつて書評は本来は決して脇役ではない筈である。Review という名を冠した学術雑誌がいくに多いことだろうか。American Historical Review のように全巻書評という雑誌さえある。本誌でも今後は会員著書のほか、研究状況展望、旧著新評を含め、近世哲学史懇話会らしい企画的色彩をもつセクションに育ててゆきたいと考えている。各位のご支援をお願いする次第である。

年内刊行という目標はあえなく潰れたとはいえ、無事に第八号をお手元に届けることができたことを喜びたい。編集作業にはオーバードクターを含む諸君のノウハウと労働力が提供されたことは今号も同じである。陳腐を承知で繰り返すばかりはないが、ありがとう！

(F)

第1号 (1994)

祝辞	-----	酒井 修
ハイデッガーにおいて哲学を —— 現存在の現象学的存在論考究 ——	-----	田中 敦
カントと初期フィヒテとの接点	-----	北岡 武司
義務論としてのカント倫理学 —— 功利主義との対比 ——	-----	蔵田 伸雄
仮象と反省 —— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——	-----	山脇 雅夫

第2号 (1995)

カント哲学における「経験」概念について —— 「世界」概念導入のための端緒として ——	-----	福谷 茂
ヘーゲルのコロポラツィオン論 —— 市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み ——	-----	早瀬 明
工学はどういうタイプの学問か	-----	齊藤 了文
信仰の情熱とその逆説 —— キェルケゴール『おそれとおのき』におけるアブラハム解釈をめぐって ——	-----	田中 一馬
ハイデッガーのヘーゲル解釈 —— 意識の二義性と意識の転換 ——	-----	橋本 武志

第3号 (1996)

『全知識学の基礎』の到達点	-----	子野日 俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ —— 理性を制度化しようとしたカントの試み ——	-----	福田 喜一郎
デカルトにおける愛の区別について	-----	武藤 整司
未済の人倫 —— 『精神の現象学』主-奴論の一解釈 ——	-----	石田 あゆみ
ガダマーのディルタイ批判 —— 『真理と方法』を中心に ——	-----	折橋 康雄

第4号 (1997)

一本の綱 (Seil) としての人間 —— ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題 ——	-----	吉川 康夫
デカルトの懐疑について —— 『省察』の「反論と答弁」を資料として ——	-----	安藤 正人
市民と国家の媒介 —— 「国民」形成の一側面 ——	-----	小川 清次

『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について ---- 橋本 武志
 自然主義的存在論の隘路 ----- 次田 憲和
 ——フッサールの「領域的存在論」における超越論的構成の「自己関係的構造」——

第5号 (1998)

「常に誤る」と「時々誤る」 ----- 武藤 整司
 ——デカルト的行論の一考察——
 デイルタイに於ける客観的精神の概念について ----- 折橋 康雄
 ハイデガールの他者論 ----- 安部 浩

第6号 (1999)

デカルトにおける《真理》と《存在》 ----- 倉田 隆
 ——明瞭かつ判明に知得されるもの——
 ヘーゲルの根拠論 ----- 山脇 雅夫
 ——知と存在との相即——
 「第五省察」の隠された論理 ----- 次田 憲和
 ——フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座——
 シェリング哲学の出発点 ----- 浅沼 光樹
 ——人間の理性の起源と歴史の構成——

第7号「菌田坦教授 退官記念号」(2000)

《講演》近世哲学における神の問題 ----- 菌田 坦
 近世哲学とはなにか ----- 福谷 茂
 ——新しい哲学史像のために——
 人間の輪郭 ----- 武藤 整司
 ——その曖昧さを擁護するために——
 知の自己吟味 ----- 山脇 雅夫
 ——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について——
 ハイデッガーの良心論再考 ----- 橋本 武志
 ——可能性概念を手がかりに——
 生と音楽 ----- 折橋 康雄
 ——デイルタイに於ける生と音楽の時間性的問題をめぐって——

編集委員会	代表	福谷 茂	
	委員	武藤 整司	山脇 雅夫
		小川 貴史	長田 蔵人

執筆者紹介

北岡 武司	岡山大学教授
福谷 茂	京都大学助教授
田中 一馬	島根大学講師
浅沼 光樹	京都女子大学非常勤講師
橋本 武志	神戸商科大学非常勤講師
長田 蔵人	京都大学大学院博士課程

(執筆順)

近世哲学研究 第8号

2002年3月31日 発行

編集・発行 京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表 福谷 茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>
TEL (075) 753-2444
振替 01080-3-31430

印刷所 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL (075) 312-4010(代)

定価 1200円(本体 1143円)

STUDIES in MODERN PHILOSOPHY

No. 8

《Articles》

- Takeshi KITAOKA : Freiheit in der progressiven Richtung 1
 — Versuch zu einer Auslegung über die Bedeutungen
 der Möglichkeit der Freiheit in der
 praktischen Philosophie Kants —
- Shigeru FUKUTANI : *Connaissance ou interprétation ?* 22
 — *Pour une nouvelle vision de l'histoire
 de la philosophie moderne (2) —*
- Kazuma TANAKA : Gilbert Harman's Logic in his Theory of Moral Relativity 52
- Kôki ASANUMA : Die Genese der geschichtlichen Vernunft 71
 — Über die Bedeutung der Mythenauslegung
 in Schellings *De malorum origine* —
 * * *

《Reviews》

- Takeshi HASHIMOTO : T. KITAOKA, *Grundlage der praktisch-dogmatischen* 93
Metaphysik Kants — Zur Problematik der Dinge
an sich und der Freiheit — [japanisch]
- Kurando OSADA : N. K. Smith, *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"*
 [Japanese translation by Fuyuki YAMAMOTO] 104
-

2001

Epistola XIV

Published by
 The Society for The History of
 Modern Philosophy
 at Kyoto University